

耳のフォークロア 身体感覚の民俗的基礎

小池淳一

Ear Folklore : A Folkloric Basis for Bodily Senses

KOIKE Junichi

はじめに

①耳塞ぎの呪法

②「聴耳」と「鯉の大助」

③耳のかたちとそこに響くもの

まとめと今後の課題

【論文要旨】

本稿は耳をめぐるさまざまな民俗を取り上げて、身体的な感覚がどのように表出しているかについて考察を加えるものである。

ここではまず、耳塞ぎの呪法を取り上げた。これは同年齢の死者が出た際にそれを見聞かれないように一定の作法を耳に施す呪術である。従来は同齡感覚を示すものと捉えられてきたが、改めて考えると日常とは異なる状態を耳に食物をあてることで表現する民俗であり、そこには呪術の受け皿としての耳の性格を見いだすことができる。

次いで、耳に関する説話として「聴耳」、「鯉の大助」を検討した。「聴耳」は人間以外の動植物の声を意味あるものとして聞くことが可能であるという認識の上に成り立っている説話で中世以降、陰陽道とも結びついて民俗的に展開している。「鯉の大助」は特定の日に川を遡上してくる鯉の発する声を聞かないようにする習俗の説明譚である。これは鯉の声を意識してはいるものの聞かないことに重点がある。こうした説話

の分析からは、耳が自然界の音と対峙するシンボルであることが浮かび上がってくる。さらに、耳に関する年中行事や俗信についても分析を加えた。耳鐘や盆行事における「地獄の釜の蓋」の伝承、カンカン地蔵、大黒の耳あけ、耳なしの琵琶法師、耳塚などの伝承を検討した。ここからは特定の条件のもとで、耳や音が神霊や怪異の世界とのつながりを持つことが、明らかとなった。

耳は聴覚器官であることはいままでもないが、民俗事象に表れる耳のイメージは聴覚だけでなく、耳のかたちとその変形を通して表出している。今後は聴覚のシンボルとしての耳だけではなく、視覚に関しても留意し、総合的に身体感覚をとらえていくことを目指したい。

【キーワード】耳塞ぎ、「聴耳」、「鯉の大助」、年中行事、耳鐘、目

はじめに

初めて自分の声を録音して聞いた時の驚きを覚えているだろうか。自分の声であるはずなのに全く聞いたことのない他人の声のように感じたはずである。生まれたときから意識していた自分の声は、他人にはそのようには聞こえていなかったのだ。自分の耳に聞こえていた声は他人には届いていない。そして他人の耳に響いている声は、自分の耳にだけは届いていないのである。もつとも親しんだ自分の声はいったい何なのか。声は人格の大きな構成要素でありながら、こうしたパラドックスのなかに実はある。

本稿は身体と人格に関する民俗学的な考察の基礎作業として、こうした耳をめぐる民俗とそこに響く声、あるいは音に関する伝承のいくつかをとりあげてみたい。身体や人格に関する民俗的な感覚は他者の理解、他者の身体感覚への想像力によって成り立っている。それを民俗的な事象を通して考究するのが本稿の目的である。そのために民俗資料を用いながらも、従来の議論とは異なり地域に還元するのではなく、身体の共同性、共通感覚を抽出することに留意しながら論を進めていきたい。

そこでここでは、まず最初に儀礼に見いだされる耳の位相について考察する。具体的には「耳塞ぎ」と呼ばれる儀礼を取り上げたい。そこでは従来の呪術の一環としてとらえる考え方とは異なり、儀礼が耳に対するどのような感覚から形づくられているのかについて検討したい。次いで「聴耳」と「蛙の大助」と呼ばれる説話について取り上げる。これらは人間以外の生命体が発する音が、人間の生活にも関わりを持つという昔話であるが、その基盤には、動物の声をどのように認識するのか、といった感覚が埋め込まれている。さらに耳そのものをめぐる信仰や耳にまつわる俗信とその背後にある耳の生活のなかの位置づけにも着目した

い。断片的な伝承であっても身体を単位として考えることで従来とは異なる視点を確認したいと考える。

① 耳塞ぎの呪法

耳塞ぎと従来の研究で呼ばれてきた儀礼がある。同年齢の死者が出たときに、その死を耳に入れないための呪的な作法であり、葬送儀礼の研究のなかで注目されてきた。その結果、さまざまヴァリエーションがあることが確認されている。具体的には以下のようなものである。

同じ村の人が死ねば同年輩の者のある家では、耳塞ぎ餅とて、餅を搗いて食ひ、一部を耳に推し当て、川へ流す。此は同年の子供が死んだ時、子供に多くやる事である。饅頭、餅菓子などで代用する事もある。⁽¹⁾

同齡の者が死ねば、餅を製して、よい事を聞き、悪い事を聞かぬ様にと、両耳を塞いで食ふ、之を「耳ふたぎ(塞)餅」といふ。⁽²⁾

前者は福島県会津地方からの報告であり、後者は新潟県中魚沼郡からの報告であるが、類例は広く分布している。同年齢の死者が出たことは実際にはすでにわかっていることであっても、こうした呪法で、死の伝染を防ごうとしたものと解される。ここでは餅や饅頭、餅菓子といった食べ物が用いられることが報告されているが、次のような事例からは耳をめぐる呪法であったことが確認できる。

丹波国北桑田郡山国村では『耳ふたぎ』とて同年の人がなくなつた事を聞くと直ちに鍋掴みで耳を誰かに挟んで貰ふ。

同郡黒田村字宮でも「耳ふたぎ」とて、同年の人がなくなると、其の凶報を本人の未だ聞き及ばぬ先に「鍋つかみ」で両耳を挟んで貫ふ⁽³⁾。

つまり、耳に死の知らせが入ることを儀礼的に防ぐことがこの習俗の眼目であり、人体の中で耳を特別視する感覚が表出しているものといふことができる。もっとも、これまではこの呪法の耳という要素に注目するよりも、さらにその背後にある心意を考察の対象としてきた。

一九三七年の柳田国男編『葬送習俗語彙』では「年たがへ」の項に関連資料が集成されており、「同齡拘束の不可解に近い俗信に、学徒の研究が向けられることを希望」と述べられている⁽⁴⁾。それをふまえ大藤時彦は、耳に関連する「耳くじり」という年中行事や餅で穴を塞ぐ「ネズフタギ」なども考察の対象とし、厄年の感覚にも注意しながら、民俗文化における同齡感覚に考察の主眼をおいている⁽⁵⁾。

この問題については井之口章次も、一連の葬送研究のなかで死の穢れの危害災難の分担、さらに食物による分配をふまえて論じている⁽⁶⁾。さらに近年では再びこの儀礼を取り上げ、誰が何のために耳を塞ぎ、「聞くな」というのか、それを誰に聞かせるのか、といった観点から、中国の道教における竈神の信仰が断片的に影響を与えている可能性を示唆している⁽⁷⁾。

なお、この民俗を考える上で見逃せないのが、平山敏治郎による耳ふさぎは中世における貴族社会のなかでも行われていたという指摘である。平山は公家や僧侶の日記を博搜して、こうした習俗が上層有識者の日常生活に入り込んでいたことを論じている⁽⁸⁾。ここでは民間の慣習が貴族層の生活にまでも採り上げられ、上昇していった、という推測がなされておられ、その点から民俗の史的な性質を考える重要なデータとして位置づけられてきた。それと同時に本稿での関心からすると、身体を基

盤とする民俗は、生活基盤の異なる集団間を容易に移動する、という見方を可能にするということを確認しておきたい。同齡感覚もそうした身体的な同一性に基づくものである。

そうした耳に関する感覚としては、佐渡の耳ふさぎを広く集め、検討した青木重孝の見解も重要である。青木は「目の行き届かぬ両耳の細い穴は外界から入りくる靈魂に誘はれて、体内から抜け出て行く人魂の通路であるといふ事が、証明されたとしてもよいかと思ふ⁽⁹⁾。」と述べ、耳の穴が靈魂の通路と認識されていたであろうことを指摘している。

耳は人間の身体の中でも顔の脇に位置しており、突出しているだけにこうした感覚が生じるのは無理のないことと言えるだろう。耳が音を聴く器官であることは、原初から日常の生活経験から自然と了解されていたことに違いない。そうすると次の問題としては音と靈魂とを結びつける感覚に注意しなければならないだろう。

そうした点については後述することとして、ここでもうひとつ注意しておきたいのは、耳ふさぎを実際に行う際に食べ物が多く用いられるという点である。このことは忌みや葬送をめぐる習俗のなかでは当然のようにとらえられがちであるが、耳を塞ぐのは物理的には食物に限定される必要はなく、実際に、食物以外で耳を塞ぐ事例は少なくない。例えば先に挙げた以外にも、山口県阿武郡の見島では「同年者の死んだ時には、他人が耳をボタンとツブシ、しかる後同年者の死んだことを告げる。三度耳を敲くこともある。亡者がくるから耳を塞ぐ⁽¹⁰⁾」などと言っていた。このことは従来、合理化であり、耳を食物で塞ぐという一見、不可解な作法が古い感覚を遺しているのだと解釈される傾向にあった。それは否定できないにしろ、身体、特に顔面には他にも穴といつてもよい器官は備わっているのだから、音を敢えて食物でさえぎるといふ方法は、象徴論的にも解釈しておく必要があるのではないだろうか。即ち、本来は口という穴によって体内に吸収されるべき食物を、耳にあてるといふ行

為は、日常からの逸脱を示し、同齡者の死という異常な事態を、身体を素材として強く表現するものなのであろう。耳に食べ物をあてるという行為は、日常ではあり得ないアンバランスで特殊な状況を身体を通じて演出し、ふだんは顕現していない身体感覚を浮上させるものなのである。そうした点から興味深い民俗として、桂井和雄が取り上げている「京見て来い」がある。これは幼児に大人がしてやる一種の遊びであり、子どもの身体を高く持ち上げる「高い、高い」に類するものである。桂井は、「あたまの後ろから両耳のところをびったりと両手に持ってもらい高くつり上げてもらう遊戯で、多くの人はもうそのしぐさの呼び名を忘れていていると思う。…(中略)…ただひとつ、以前幡多の十川村(現十和村)でこのしぐさをミミアゲ(耳上げ)と記憶している人があつた⁽¹¹⁾」と述べている。

これも脇の下や胴ではなく、耳に手を押し当てて身体を持ち上げる点に独特の意味があつたと考えてよいのではないだろうか。耳を塞ぐことによつて、通常の音が遮られ、特異な感覚に包まれ、さらに視点も高くなつて、まさに「京」、すなわち日常の生活圏を越えた世界が見えるのである。

耳を基点とする伝承的な知識には、他にも示唆的なものが少なくない。蛇をめぐる呪いをめぐって常光徹が取り上げている事例も耳の民俗を考へる上で看過できない問題をはらんでいる。常光によると、高知の山間部で、蛇が穴に入って抜けぬ時は、右手に蛇の尾をからめ、左手で右の耳をつまんで引つ張ると抜けるのだという知識が伝えられていた。これは近世の『和漢三才図会』や随筆『耳袋』などに載せられてはいるものの当時、既に素性がはつきりしないものになっていたようである。常光はもともとは耳に何らかの特徴のある人々がそうした特殊な能力を超世代的に継承しているという観念と関係があるのではないかと論じている⁽¹²⁾。

耳を塞いだり、変形させる習俗にはこうしたさまざまな解釈が可能であるが、身体感覚としては呪術の受け皿、いわば、呪器としての耳、もしくは呪術のシンボルという位置づけが可能であろう。次にそうした位置づけを別のレベルで考えていくために、耳をめぐる説話を取り上げて検討してみたい。

② 「聴耳」と「鯉の大助」

「聴耳」という昔話は『日本昔話通観』では「聞き耳頭巾」という話型名が付与され、「むかし語り」のなかで「呪宝」に分類されている。そこでは次の三つの要素から成ると整理されている。

- ① 男がいつも神詣でをしていると、神様が、かぶると動物の言葉のわかる頭巾をくれる。
- ② 男が頭巾をかぶると、鳥の群れが、長者の娘の大病は柱の下になった蛇と蛙のいさかのためだ、と話しているのがわかる。
- ③ 男は、八卦見のふりをして長者の家の柱の下から蛇と蛙をとり除いて娘を治し、その婚に迎えられる⁽¹³⁾。

すなわち、呪宝を入手することで動物の声を理解することが可能になるという発想が、この説話の根底にあり、ここではそれが頭巾という具体的なモノとなって表象されているのである。動物の鳴き声もまた意味のある会話を交わしているという認識に支えられているとも言える。この場合の頭巾は、耳の力を動物の世界にまで拡張する意味を説話のなかで担っている。

ただし実際には、①～③の要素だけではなく、不思議な機縁で、動物の声を解することができるようになった主人公が、その能力を使って成

功を収めるという粗筋にさまざまなヴァリエーションが生じ、伝承の過程で変化を遂げている場合が多い。例えば次のような説話である。武田明による『西讃岐地方昔話集』（一九七五年）に収められているもので、もともとは昭和十四年に採集された資料である。

若い獵師が山中を歩いてゐると、蟹が出て来て足を挟んだので殺さうと思つたが助けてやる。歩いて行くとまたも同じやうな蟹が出て来て足を挟むがまた逃がしてやつた（とある）。そんな事でもう一度くり返されたが、獵師は情深いのでまたまた逃がした。その蟹は獵師に少し待つてゐるやうにと言つて去る。待つてゐると赤い小さい珠を持つて来、この珠を耳に入れると木の話しが聞えると言つた。早速獵師が耳に入ると近くの松の木が、向ふの川岸に鹿が二匹ゐて楽しさうだと話してゐる。獵師は早速川岸へ行き鹿を捕へる。このやうにして獵師は後に長者となる。

ここでは、耳の能力を拡張するのは頭巾ではなく、蟹が持つてきた「赤い小さい珠」であり、聞くことができるようになるのは動物の声ではなく、「木の話し」であった。呪宝は頭巾にのみ固定されているのではないことを示し、また耳の能力は動物ばかりではなく、植物にまで及ぶこととなっている。

また③の要素として主人公が八卦見すなわち占いを業とする者を装う点は、この説話が宗教的な職能者の伝記の一部となりうることを示している。「聴耳」の昔話は、中世の陰陽道書『篋篋』の注釈書『篋篋抄』の冒頭のいわゆる「由来の章」に取り込まれている。そこでは『篋篋』の伝来が示されるが、同時に安倍晴明の幼年期の出来事として、「聴耳」説話が挿入されているのである。当該箇所は次のように述べられている。「安倍童子が」閻浮二帰ラント暇ヲ折節、龍宮ニテ烏葉ヲ耳ニツケ給

フ、無程、元ノ鹿島ニ帰り、諸鳥ノ囀ヲ聞クニ、能ク聞知ル也。⁽¹⁵⁾ 安倍童子のちの晴明は、龍宮で耳に葉をさしてもらい、特異な能力を身につけたこととなっているのである。

民俗レベルで注意しておきたいのは、こうした陰陽道とその周辺において用いられたこの種の説話が、昔話の形態で伝承されることも少なくともなかったことである。次に掲げるような場合である。

昔道満童子という子供がいた。ある日堺の浜を歩いていると、子供が海亀をいじめている。童子は可哀そうに思つて、赤い着物を子供らにやっけて海亀を助けて逃がしてやつた。

その後また海岸を歩いていると亀が出て来て背中に背負われなさい、というようにするので、亀に負われて海の中へ行った。海亀は乙姫様であった。そうして童子は海の底で乙姫様に可愛がられて暮らしていたが、家へ帰りたくなつたので、暇を乞うと、乙姫が十二の節ある竹の根をくれた。それを耳にあてると、鳥の鳴声、狐の鳴声、声がきこえる。童子はそれをもらうとこの世に戻つて来た。ある日しきりに鳥が鳴いているので、根節を耳へあてて見ると、鳥同士が話をしているのであった。

「近頃都で天子様が御病氣にかかつて、なかなか重いということだ。どんな病氣の種か分らぬという」

「いやいやそれは分つてゐる。大工が御殿をたてる時、蛇と蛙とナメクジを、家の下へ一緒にいけたのだ。それが祟つてゐるという」

これをきいた童子はよいことをきいたものだと思つて、さっそく京都へやつてきた。（後略）⁽¹⁶⁾

これは戦前における奈良県吉野地方の伝承であり、「聴耳杖」と題されているが、主人公の名前が異なっているものの『篋篋抄』由来の章が

昔話の様式で伝承されていたことを明瞭に示している。「聴耳」説話とその背景にある耳の能力の拡張という観念は、陰陽道とそこから派生、展開して、伝承世界においても大きな意味を持つことになったと推測できる。このことは耳に対するイメージが陰陽道の影響でより豊かになったことを示しており、さらにその時期はおおむね、中世以降と考えられるのである。

次に、同じように説話レベルで耳に関する民俗的なイメージを示すものとして「鮭の大助」を取り上げてみよう。この「鮭の大助」は『日本昔話大成』で新話型として登録されたもので、本格新13という番号が与えられている⁽¹⁸⁾。その一方で伝説として扱われるべき要素も持っており、⁽¹⁹⁾その性質は山形県下における年中行事の由来を語るといふ点によく表れている。

山形県最上郡最上町では、以下のように伝えられていた。

昔は、秋になると小国川を鮭の魚がまっ黒くなるほどのぼつて来て、手づかみで取れたそう。鮭漁をヨオ待ちと云った。十月二十日のエビス講の日はヨオ待ちを休みにするのがならわしで、魚の王の鮭の大助が、「サケノオオスケ、いま通る」と叫びながらのぼる。この声を聞いた者は急死すると信じ、にぎやかに餅つきをして、「耳ふたぎ餅」といい、酒盛りをしてすこす。(後略)⁽²⁰⁾

鮭の王である大助が遡上してくる時は不思議な声が発せられ、それを聞かないために、エビス講が行われ、耳ふたぎ餅が搗かれる、というのである。

既に野村純一が、「鮭の大助」譚の伝承の背景にはこうした流域の習俗が深く関わっていることを周到に論じており、この説話と年中行事とが補いあう関係にあったことが明らかとなっている⁽²¹⁾。それとともに、鮭

の発声という日常あり得ない音を聴く、あるいは聴いてしまう可能性がある日がエビス講であり、餅を搗くのは講に必須の作業というだけでなく、耳をふさぐことを目的としていたのである。前節でみたような同業者の死に対する対抗呪術とはいささか目的の異なる餅の調製なのであった。

「聴耳」は自然界の音を、何らかの機会や力によって意味あるものに変換できる、という説話であったのに対して、「鮭の大助」は自然界の音を意識的に聴かないようにする起源と方法を説いている。これらの説話は、耳に集約される民俗的な身体感覚が、人間の言葉以外の音に意味を見出すという点に表出していることを示している。こうした説話は人間以外の生物の言語学の民俗的な表現とも言えるだろう。

自然界のさまざまな音には意味があるという認識は民俗として伝えられてきた。それを解説する可能性としての耳に注意する必要がある。耳は単なる人体の一器官ではなく、そうした音との対峙の象徴なのであった。こうした観点で、さらに次節では、さまざまな習俗に見え隠れする耳と音の問題を考えてみよう。

③耳のかたちとそこに響くもの

民俗学者の最上孝敬は、「耳鐘の話」という論考のなかで、自身の奇妙な経験について記している。最上の学生時代、親しかった友人が半年以上、寝込んだ末に亡くなったことがあった。その晩、最上は机に向かっているとき突然激しい耳鳴りに襲われ、身体中ががくがくと痙攣でもするような感じがした、という。それは止めようとしても止まるようなものではなく、いつか、さっと水がひくようにおさまった。もしやと思い、時計を見ておいたのだが、後で聞くとまさに友人の臨終の時間にあたっていたのである。⁽²²⁾

これを最上は、第一節でふれた「耳塞ぎ」に連なる同齡感覚の表れととらえている。「耳塞ぎ」と異なるのは、耳を塞ぐ食物や道具、あるいはその際に唱える言葉などはなく、直接、耳の奥に自然発生的に音を感じた点であり、最上は「昔の人々はそれを死者の霊が親しい友人をひっぱりにくると解しおそれたので、その極度の恐怖感はそのようないれん麻痺状態の発生を一層容易にし、その経験をかなり普遍的なものとしていたのであろう。」と述べている。そして「いわゆる耳塞ぎの習俗も、こうして生じた耳鐘をはやくしずめ、あるいはその生ずるのを防ぐ呪法である⁽²³⁾」と位置づけている。

耳塞ぎのように何らかの媒介物や唱え言が介在しない耳鐘も各地からの報告があり、最上のように耳塞ぎと連なるものと考えることが一般的である。例えば、和歌山県西牟婁郡川添村市鹿野からの「オナイドシの者の死んだ時は「ミミガネが鳴る」といつて気持悪がる。オナイドシの者の耳の奥がジンジン鳴る日は「あゝ今日はオナイドシの人が死んだ」といつて其死を知る。」⁽²⁴⁾といった報告がそれである。

しかし、身体に即して考えるならば、耳鐘は、外部から音が流れこんでくるわけではない。耳塞ぎが外部からの音、すなわち同年齢の死者の情報を入れまいとする行為であるのに対して、耳鐘は身体の内側に生じる現象なのである。もちろん、この音は他者には感得することが出来なものである。

音の発生とその感受という点から考えると、耳鐘は耳塞ぎの基盤で、一連のものというよりもより内在的なものである。さらに同年齢の者の死という一定の条件にあたって耳が通常聞こえない音を聞くことになるという観念であり、そうした感覚に対する知識ということが出来る。

不意に訪れる死という条件下で耳を意識する耳鐘に対して、特定の手法で耳の感性が変異するのが「聴耳」の昔話の構成要素であり、エピソードの晩に耳の感性をコントロールしようとするのが「鮭の大助」の伝説

であった。そしてこうした耳の感性にまつわる伝承は他にもいくつか見いだすことができる。

毎年、盆の準備が始まる頃に、畠の土に耳をあてると地獄の釜の蓋があく音が聞こえるという伝承がある。千葉県君津郡、市原郡あたりからは旧暦の七月一日を「釜の蓋の朔日」といい、「此日茄子畠に行き、耳を地に付けて聴くと、地獄の釜の蓋の開く音、精霊の叫ぶ声を耳にすることが出来ると謂ひ、今尚茄子畠に入るのを忌む習慣だけが少し残つて居る。」⁽²⁵⁾と報告されている。また茨城県新治郡からは同じく七月一日を釜蓋一日といい、「仏が地獄よりでくくる日にて土に耳をあてると音がきこえるといふ。」⁽²⁶⁾と報告されている。

これらは、盆行事の始まりにあたって、普段は地獄にいる死者たちがこの世をめざすために地獄の釜の蓋が開くのだ、という仏教的な解説が民俗化したものであることは言うまでもないだろう。これを年中行事の伝承として捉え直してみると、特定の日には地獄の音が聞こえるという伝承であることに気づかされる。その際には畠の土に耳をあてるといふだんはしないであろう行為が、そうした不思議な音を聞く技法であり、それはまた決しておこなってはならない禁忌でもあった。

さらに年中行事や民俗信仰の中には神仏に対して耳を強調したり、神仏の耳をことさらに意識する伝承があることにも注意すべきであろう。耳の病治しに関する霊験として、高知県幡多郡橋上村あたりでは、穴のあいた石をつんぼ石と云い、それを患っている耳にあてがってから神に献じると病気が治るといった。また、長崎県五島の宇久島神の湊の入り口にあるつんぼ夷様という石神には、穴のあいた石をあげるとやはり耳が聞こえるようになるとされていた。⁽²⁷⁾

耳に限らないようにみえるが、次のような事例にも注意すべきであろう。山梨県東八代郡中道町の右左口ではカンカン地蔵ともヤク地蔵とも呼ばれる地蔵が祀られている。この地蔵は「自分の体の痛いところがあ

る場合、地蔵の体で自分が痛い部分と同じ場所をたたいて痛みがとれるように願をかける。このため地蔵の各所に穴があいている⁽²⁸⁾。という。病氣治しの祈願にあたって、地蔵を叩くという点が興味深い。耳とは無関係なようだが、叩くことで音を発生させることを考慮すると特定の状況のなかで耳と音を意識する伝承の一端に位置づけることができるだろう。

また、「お大黒様の耳あけ」と称する行事にも注目しておきたい。山形県南置賜郡上長井村笹野一本杉では旧暦の十二月九日に次のように行われていた。

農家では夜になると、囲炉裏で炒つた豆を一升杓に入れて、杓を両手で支へ、左右にゆさぶり乍ら向ふ三軒両隣りへも聞える程の大きな声で「お大黒様、お大黒様、耳をあけておりもうすから佳えこと聞かせて下さい」と唱へ、一寸ゆさぶる手をやめて豆をお大黒様の列んでゐる方や、辺り一面に撒き、又「お大黒様、お大黒様……」と唱へて豆を撒き、斯くて三度繰返して終るのである。⁽²⁹⁾

これも特定の日に「佳いこと」を聞く耳の能力を意識し、それが可能になることを祈る行事である。なお、前節で検討した「鮭の大助」の伝承において、その声を聞かまいとする行事が大黒と並んで家の神として意識されるエビス講の行事であることにも留意すべきであろう。「鮭の大助」におけるエビス講は家の神としての性格だけではなく、漁撈の神としての意味合いがあることに留意しつつも、こうした耳に関する伝承が、民俗的な神観念と結びついていることを確認しておきたい。

このように見ると特定の条件、状況のもとに耳を意識する伝承はかなり多く、それらは実際に聞こえるか否かが問題ではなく、耳を外界もしくは他界からの情報を受け止め、あるいは発信するシンボルとして

位置づけられることに主眼がある。耳は音を聞く器官であるからそれは当然のことのようにも思われるが、そこには耳を結節点とした想像力の展開が見られるのである。

民俗的な想像力を考えようとする場合、怪異に着目するのも有効な方法である。安井真奈美は、妖怪に狙われる身体という観点から日本人の身体観を追究している。安井によれば、耳は目に次いで妖怪と接点を持ちやすい身体の部位であり、このことはあの世の出来事を感じるためにはとりわけ聴覚が重要であるという人々の認識のあり方を示していると言う。⁽³⁰⁾確かに耳は耳そのものというよりも聴覚のシンボルであった。

そしてそのことを意識してよく知られた伝承も改めて捉え直す必要があるだろう。小泉八雲の書いた「耳なし芳一」は、民俗的な説話を題材にしていることはよく知られている。徳島県では次のような伝説として記録されている。

徳島県板野郡里浦村に昔団一と云ふ盲目の琵琶法師があつた。ある夜一人の官女らしい者が来て、今宵御殿で宴会が催されるに依つて是非出て貰ひたいとの言葉に、団一はその晩早速行つた。斯くして毎晩其御殿に行つてゐる中に、次第に身の衰弱するのを覚えたが、あまり気にも止めないであつた。ある旅僧が此村の墓地を通ると、一人の瘠衰へた琵琶法師が一心不乱に琵琶を弾いてゐる、旅僧は様子を聞いて、目と云はず、鼻と云はず、身体中をまじなひしたが、耳を忘れて居た。翌晩になると又例の官女らしいのが来て団一を伴れて出やうとしたが、団一の身体には禁厭^{まじなひ}が施してあるから中々伴れて行く事が出来ずに耳を持つて行つてしまつた。耳切団一の話として土地の人は今も話して居る。⁽³¹⁾

耳のみがもぎ取られる結末は、盲目の琵琶法師が主人公であるから余

計に耳こそが他界との交流の象徴であることを鮮明に示している。そして聴覚のシンボルを失った悲劇が一層心に沁み、強く印象づけられる。

柳田国男は「鹿の耳」のなかで、この説話は、実は耳に特徴を持つ盲目の芸能者自身が語り手となって伝えられたのではないかと示唆している。³²⁾それは目や耳といった身体の一部をわざと傷つけ、それこそが神霊と相通じるものと捉えられてきた心性を論じる柳田の妖怪論、伝説論の一環でもあるのだが、耳の変形あるいは切断というそれだけでも大きなテーマに通じる。

さてこうして身体から切り離された耳はどうなるのだろうか。そのことを考える素材として日本各地に耳塚の伝承がある。福井県敦賀郡東浦村五幡では、聖武天皇二十年に蒙古が来寇した時に、鉄輪その他の賊の首を埋めたところが耳塚であると伝えている。³³⁾また長崎県対馬では、奴加岳村大綱にある耳塚は、糠嶽の合戦で敗走した敵兵の耳を切り集めて埋めたのだと言っていた。³⁴⁾

こうした耳塚は戦いによる異常死がその製作理由となっており、背後には御霊信仰をうかがうことができるのではないだろうか。つまり、祟りを引き起こす可能性のある死者を鎮めるために塚を築き、とりわけ耳をそのシンボルとして意識したのである。切り取られた耳は人格の代替物であり、かつその処理の象徴でもあった。

まとめと今後の課題

以上、本稿では耳をめぐる民俗として、耳塞ぎをはじめとする儀礼、「聴耳」や「鯉の大助」といった説話、さらには年中行事や妖怪伝承のなかで音を受け止めたり、特定のコンテキストのなかで耳を意識する事例を取り上げて検討してきた。最後に、とりあえずのまとめと今後の課題について述べておきたい。

民俗的には音は何らかの怪異や霊魂の到来を意味するととらえられ、耳はそうした思考回路のシンボルというべき存在であった。その際に耳に響くとされている音は、外部からばかりではなく、身体の内部から生じるものとされる場合もあった。さらにそうした特殊な音の聴取、異能が発揮されている状態は、何らかのモノの装着や耳そのものを変形させて示す場合も多かった。また、特定の条件のもとで、音を聞く場合には、それがどういった音であるかが問われることは少なく、抽象的な音という認識であり、また音を意識していても、実際に聞くことは禁忌になっている場合があった。

こうした民俗の検討から、聴覚器官としての耳に対する民俗は、耳そのものが単独で伝承されるというよりも、特定のコンテキストのなかで意味が生じ、記憶されてきたのだと言えるだろう。そしてその場合、耳の聴覚的な機能ばかりではなく、外見、すなわち耳のかたちや状態も問題となっていたのである。これは耳のフォークロアは耳だけでは成立せず、視覚的な情報もふまえて伝えられてきたことを示している。このことは「聴耳」の説話などでは、もともと耳そのものに備わる筈の能力が、頭巾などの具体的なモノで表現されていくようになったこととも関連する。とすると次なる課題は本稿における耳をめぐるフォークロアを視覚をも含んだ、いわば、耳と目の両面に関わる検討ということになるだろう。

耳をめぐる身体感覚は、聴覚ばかりでなく、視覚と相伴って表出する。視覚と聴覚とが連動することで民俗的な身体感覚が築かれているともいえよう。とするならば、次に取り組むべきは本稿の成果を意識しつつ、目のフォークロアということになる。本稿で十分に考究することができなかつた諸事例についての追考を期しつつ、民俗的な身体と人格についての検討の第一歩として本稿を位置づけたい。

註

- (1) 坂内亀彦「会津の俗習二三」(『郷土研究』七卷三号、一九三三年、郷土研究社、二六頁)。なお、引用については仮名遣いは原文のままとし、漢字については特に断らない限り、通用のものに改めた。以下、引用については全て同じ。
- (2) 宮沢清文「新潟県中魚沼郡」『旅と伝説』第六年七月号(誕生と葬礼号)、一九三三年、三元社、六一―六二頁、六二頁。
- (3) 井上頼寿「耳塞餅」(『近畿民俗』一卷二号、一九三六年、近畿民俗刊行会、三二―三六頁)、三五頁。
- (4) 柳田国男編『葬送習俗語彙』(一九三七年、国書刊行会復刻一九七五年)、三六頁。
- (5) 大藤時彦「耳塞餅」(同『日本民俗学の研究』、一九七九年、学生社、二七五―二八八頁)。
- (6) 井之口章次「耳ふさぎ」(同『日本の葬式』、一九七七年、筑摩書房「叢書」、五〇―六〇頁)。
- (7) 井之口章次「好多説・不好少説―耳ふさぎ・耳くじり」(同『生死の民俗』、二〇〇〇年、岩田書院、一四三―一六二頁)。
- (8) 平山敏治郎「耳ふさぎ史料」(初出は一九四七年。のちに史料を増補して、井之口章次編『葬送墓制研究集成(第二巻) 葬送儀礼』(一九七九年、名著出版)、一九六―二一三頁に収録)。
- (9) 青木重孝「佐渡の耳ふさぎ」(『旅と伝説』一三巻九号、一九四〇年、三元社、三四―三六頁)、三四頁。
- (10) 瀬川清子「日間賀島・見島民俗誌」(一九七五年、未来社)、二二二頁。
- (11) 桂井和雄「京見てこい」(同『仏トシボ去来―桂井和雄土佐民俗選集(第一巻)―』、一九七七年、高知新聞社、一五五―一五八頁)、一五五頁。
- (12) 常光徹「動物をめぐる呪い」(同『しぐさの民俗学―呪の世界と心性―』、二〇〇六年、ミネルヴァ書房、一六五―一九二頁、一六六―一七〇頁)。
- (13) 稲田浩二『日本昔話通観(第二八巻) 昔話タイプ・インデックス』(一九八八年、同朋舎出版)、二七九頁。
- (14) 武田明『西讃岐地方昔話集』(一九七五年、岩崎美術社)、五三頁。
- (15) 美濃部重克「解説」『たまも』(美濃部重克・田中文雅『室町期物語』、一九八五年、三弥井書店、二八―七四頁、六四頁より引用。なお、『臥雲日件録抜尤』の応仁元年(一四六七)十月廿七日条には晴明の逸話として記載されている。ただし、ここでは聴耳となる経緯についての記述はない。ここから中世期に注釈、直談の世界において、「聴耳」の説話、さらには、耳の能力が動物の世界にまで伸展する発想がもてはやされていたらしいことがうかがえる。この点については、はやく渡邊守

- 邦「簠篋抄以前―狐の子安倍の童子の物語―」(『国文学研究資料館紀要』一四号、一九八八年、国文学研究資料館、六三―一三三頁)に指摘があるほか、悉曇学や法華経注釈の場において、この「聴耳」説話が機能していたことが指摘されている。佐藤優「聴耳」説話の形成と展開―中世期の説話を中心として―(『口承文芸研究』三二号、二〇〇八年、日本口承文芸学会、四四―五七頁)を参照。
- (16) 引用は宮本常一『吉野西奥民俗探訪録』(宮本常一著作集(第三四巻))、一九八九年、未来社、八一頁に拠った。
- (17) 道満は『簠篋抄』由来の章においては安倍晴明のライバルとして描かれる。どういうわけか混乱したと思われる。
- (18) 関敬吾、野村純一・大島廣志編『日本昔話大成(第一巻) 資料篇』、一九八〇年、角川書店、六五頁。
- (19) 関連する資料は野村純一編『日本伝説大系(第三巻) 南奥羽・越後編』、一九八二年、みずうみ書房、四三―四七頁に集成されている。
- (20) 佐藤義則「羽前小国郷の伝承」(一九八〇年、岩崎美術社)、二〇―二二頁。
- (21) 野村純一「鮭の大助」の来る日(同『昔話伝承の研究』、一九八四年、同朋舎出版、二五―二八頁)。
- (22) 最上孝敬「耳鐘の話」(『西郊民俗』四号、一九五七年、西郊民俗談話会、一三頁、一頁。なお、この論文の存在については大島建彦先生に御教示いただいた。明記して御礼申し上げる)。
- (23) 前掲註(22)、二頁。
- (24) 真砂光男「熊野探訪録」(『民間伝承』一三巻九号、一九四九年、一九頁)。
- (25) 谷中国樹「上総君津郡及び市原郡」(『民族』一卷五号、一九二六年、民族発行所、一七九―一八一頁)、一七九頁。
- (26) 中川さだ子「茨城県新治郡上天津村神立地方の年中行事」(『民俗学』三巻三号、一九三一年、民俗学会、三八―四一頁)、四〇頁。
- (27) 桜田勝徳『漁村民俗誌』(一九三四年、一誠社)、九八頁。
- (28) 東洋大学民俗研究会編『石左口の民俗―山梨県東八代郡中道町左右口地区―』(一九八四年、東洋大学民俗研究会、一三三頁。なお、カンカン地蔵やカンカン石については長沢利明「カンカン石・カンカン地蔵」(同『江戸東京の庶民信仰』、一九九六年、三弥井書店、九九―一〇〇頁)を参照)。
- (29) 田村壺「お大黒様の耳あけ」(『民族文化』二巻三号、一九四一年、山岡書店、七―八頁)、七頁。
- (30) 安井眞奈美「妖怪・怪異に狙われやすい日本人の身体部位」(小松和彦編『妖怪文化研究の最前線』、二〇〇九年、せりか書房、二四四―二六八頁)、二四九―二五二頁)。
- (31) 中島松三郎「耳切団一」(『郷土研究』二巻四号、一九一四年、郷土研究社、

五七頁に拠った。

(32) 柳田国男「鹿の耳」(『柳田国男全集(第七卷)』、一九九八年、筑摩書房、四六三―四八二頁)、四七五―四七七頁。

(33) 大矢真一編「分類索引・福井伝説集」(『南越民俗』二卷三号、一九三九年、南越民俗発行所、二一―一六頁)、九頁。

(34) 対馬教育会編『改訂対馬島誌』(一九四〇年、名著出版復刻一九七六年)、一三九頁。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(二〇一〇年九月二七日受付、二〇一一年二月二日審査終了)

Ear Folklore : A Folkloric Basis for Bodily Senses

KOIKE Jun'ichi

This paper looks at various examples of folklore related to ears, and goes on to consider the ways in which bodily senses are expressed in folklore.

I first consider the earplug charm, which is a magic practice by which people would insert something in their ears when a person of the same age died, so as “not to hear of it.” This custom was previously interpreted as representing a sense of identity with people of the same age, but when you think about it, this is a folkloric custom whereby people put items of food in their ears to signify out of the ordinary circumstances. This practice suggests that ears were regarded as a receptacle for spells.

I next look at two tales related to ears, “Kikimimi” (聴耳) and “Osuke the Salmon” (鮭の大助). “Kikimimi” is based on the belief that the voices of creatures other than people can be heard as intelligible sounds. It appears in Japanese folklore from the Middle Ages onwards, and is also linked with yin and yang beliefs. Osuke the Salmon is a tale for explaining the custom of avoiding hearing the voice of salmon climbing the river on specific dates. The emphasis in this tale is on knowing about the voice of the salmon but not listening to it. Analysis of these tales leads to the conclusion that the ear was seen as a symbol of the interface between man and the sounds of nature.

I also analyze regular annual events and beliefs regarding ears, including folktales about ear bells, the lids of the pots in Hell in relation to the summer Bon festival, Kan Kan roadside deities, the ear piercing of Daikoku the God of Wealth, the earless Biwa priest, and ear mounds. Analysis shows that under certain conditions, ears or sounds are thought to be able to serve as links to spirits or the supernatural world.

It goes without saying that ears are organs for hearing, but the image of ears that emerges from Japanese folklore is concerned not only with hearing, but also with the shape and changes in shape of ears. Looking ahead, I want to consider ears not only as symbols of hearing, but also pay attention to visual aspects, and attempt an integrated approach to bodily senses.

Keywords: ear plug, “Kikimimi(聴耳)”, “Osuke the Salmon(鮭の大助)”, annual events, ear bell, eye
